

キャリア教育実践に貢献できる教師教育の課題

河崎智恵

(奈良教育大学 生活科学教育講座)

The Study of Teacher Education contributing Career Education Teaching

Tomoe KAWASAKI

(Department of Home Economics Education, Nara University of Education)

要旨 本研究の目的は、キャリア教育実践に寄与する教員養成教育の課題を明らかにすることである。そのために、小・中・高等学校のキャリア教育実践事例から現状を明らかにするとともに、教員養成大学の学生を対象に質問紙調査を実施した。学校教育現場では「総合的な学習の時間」を中心としてキャリア教育が実施されつつあるが、教科での指導は「総合的な学習の時間」の補完的な内容にとどまっていた。一方、大学生は「キャリア教育」に関する知識はほとんど持ち得ておらず、大部分はメディアを情報源としていた。キャリアの能力においては男女ともに「肯定的な自己理解」「意思決定の自信」が低かった。また、81%の者が将来への不安を持ち、就職後の生活における、職業キャリアと生活キャリアに関する長期的な内容を包含していた。キャリア教育の基礎的知識の習得、教科等での指導能力の育成とともに、自己のキャリア能力の育成が課題である。

キー・ワード キャリア教育 career education 教師教育 teacher education 大学生 university students

1. はじめに

1. 1. 背景

近年、学校教育においてキャリア教育の導入・実施が急務の課題となっている。1999年に中央教育審議会答申にて、キャリア教育を小学校段階から実施することが提言され、キャリア教育は学校における教育課題の一つとして認識されるようになった(文部省、1999)。

その答申において、キャリア教育は「学校教育と職業生活との円滑な接続を図るため、望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育(キャリア教育)」と示された。そして「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育(望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育)を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。」と、キャリア教育を小学校段階から実施することが提言された。この答申は、国の教育行政に関する文章にて初めてキャリア教育という言葉が示されたという点において、画期的なものであったといえる。

すでに仙崎らにより進路指導におけるキャリア教育モデルも開発され、学校キャリア教育は各教科を含む学校教育活動全体を通じて、指導・援助していくものと考えられている(仙崎武・職業教育・進路指導研究会、1998)。本モデルでは、育成すべき4つの能力として、キャリア設計能力、キャリア情報探索・活用能力、意思決定能力、人間関係能力が示され、これらの能力を小・中・高等学校の12カ年で総合的に育成する構造が明示されている。

2004年に文部科学省は、初等中等教育におけるキャリア教育の基本的な方向等について総合的に検討し、その結果を「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究会議報告書」として公表している(文部科学省、2004)。そこでは、キャリアは「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖」として、またそうした連鎖の中で行われる「自己と働く事との関係付けや人生における働くことへの価値付けの過程及びその累積」として捉えられている。そして、キャリア教育は「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と示されており、中央教育審議会答申(文部省、1999)における定義より広い概念で捉えられている。

さらに、キャリア教育を各教科においても実施する構想が提示されている。職業に関する教科だけでなく、家庭科（中学校は技術・家庭科）、社会科、保健体育等の教科で実施されることが示されている。

しかしながら、現状では学校でのキャリア教育への取り組みは途についたばかりであり、教科との関連やキャリア教育の在り方については、多様な考え方が錯綜している。キャリア教育の指導方法を身につけた教員も不足しており、共通理解に至っておらず、教師の役割や課題についても明確になされていないのが実情である。

このような課題に対して、近年、教員養成大学（教育学部等を含む）においてもキャリア教育の実施が検討されるようになった。しかしながら、その多くは、学生の就職支援を目的としたものであり、キャリア教育の指導者育成という教育的視点は希薄と言わざるをえない。

そこで、本研究では、今後のキャリア教育実践にむけての、教師教育の課題を検討していく。なお、教師教育には教員養成教育と現職教員教育が含まれるが、本研究では教員養成教育に限定して言及していく。

1. 2. 本研究におけるキャリアおよびキャリア教育の概念

キャリアという語はラテン語のcarrus（車）およびcurrere（走る）を語源とし、そこからその道に沿って人が進むこと、生涯、経歴という意味に発展したといわれる（Partridge, E. 1963）。我が国においてはこれまで「キャリア」という語は、一般的には有資格の特殊な職業の意味で用いられることが多かった。しかし、近年では前述の文部科学省におけるキャリアの概念にもみられるように、キャリアは職業のみを指すのではなく、人生や生き方を含めたより広範囲な概念として捉えられるようになってきている（文部科学省、2004）。

本研究では文部科学省により示されたキャリアの概念、すなわち「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖」という広義のキャリアの概念を認める。その上で、狭義では、様々な立場や役割を「生活の場」から捉え直して、「生涯にわたる家庭生活や地域生活における役割や実践の道筋・進路」を生活キャリアとして、「生涯にわたる職業や職務の道筋・進路」を職業キャリアとして定義する。

また、上述のキャリアの概念に基づき、生涯発達と多様な役割という観点から、キャリア教育を「生涯学習において、職業生活および家庭・地域生活の中で自己実現が可能となるための組織的・統合的教育」と定義する。筆者は、このようにキャリア教育は生涯教育の中で実施されるべきものと考え、小・中・高等学校でのキャリア教育については、文部科学省の定義、すなわち「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、

それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」（文部科学省、2004）に準ずるものとする。

2. 目的および方法

2. 1. 目的

本研究の目的は、キャリア教育実践に貢献できる教員養成の課題を明らかにすることである。そのために、①小・中・高等学校のキャリア教育の教育実践事例から学校教育現場での現状・課題を明らかにしたうえで、②教員養成大学の学生を対象にキャリア教育に関する質問紙調査を実施・分析し、課題を検討する。

2. 2. 方法

まず、我が国でキャリア教育が提言された1999年以降のキャリア教育実践状況について、雑誌「進路指導」日本進路指導協会の1999年1月号～2004年12月号に掲載されている小学校・中学校・高等学校のキャリア教育の実践事例より分析を行った。

次に2003年2月に奈良県の教員養成大学の大学2年生、男女73名を対象にキャリア教育およびキャリア発達に関する調査（質問紙調査）を実施した。有効回答数は、男性47人、女性23人、計70人である。調査項目は、キャリア教育に関する知識に関する項目、キャリアに関する能力についての項目、不安に関する項目から構成される。

キャリアの能力領域に関する質問項目の作成にあたっては、家庭科におけるキャリア教育モデルの能力領域尺度（河崎、2003）を参考とした。家庭科におけるキャリア教育モデルの能力領域とは、自己理解、人間関係、情報収集/経験、意思決定、ライフキャリア・プランニングの5能力領域である。解析にはSPSS統計パッケージ（Ver.11.0）を利用した。

3. 結果と考察

3. 1. 小・中・高等学校におけるキャリア教育の実践状況

1999年～2002年においては実践事例の総数34件中、中学校が26件、小学校と高等学校はともに4件となっており、大部分は中学校での実践報告であった。キャリア教育が提言された1999年から数年間に、小学校での実践事例が少ない背景には、小学校では進路指導が実施されてこなかったことが関与していると推察される。

小・中・高等学校のいずれの学校段階においても、多数の実践が認められるようになったのは、2003年以降である。小・中・高等学校の実践内容を比較検討するために、2003年以降のキャリア教育実践状況につい

表1 雑誌「進路指導」にみられるキャリア教育実践事例

掲載年	小学校	中学校	高等学校
2003 (H15)	<p>●「新しい生活を楽しく始めよう」 1年 あいさつについて学ぶ 3年 「泣いた赤鬼」(友達の良さに気付く) 6年 「マンガ家になろう」(手塚治虫の人生を通して好きな職業を目指す強い思いを学ぶ・自分の長所を見つける) (道徳・特活)</p> <p>●「ほめほめ大会をしよう」(特活) 互いの良いところを知る 「自分のよさを伸ばしている人に学ぼう」(道徳) 欠点を美点に変えた人の話を考える。 自分を見つめるカード</p> <p>●「自分の得意なことを係活動に生かそう」(特活) 自分の得意な事を紹介しあう。 得意な事をいかせる係活動を考える。</p> <p>●「上級学校調べ」(道徳・総合) 「自分発見！現在・未来」 職業についての話を聞く、調べる 自分を見つめる(自分の興味・関心) インタビュー・職場体験・見学</p> <p>●「わたしのゆめ一仕事編」(6年・総合) 職業調べ・職場体験・ゲストティーチャーを招いて職業について話を聞く。</p> <p>●「私は家族の一員です」(家庭科) 家庭の仕事を調べる。 お手伝いと分担の違いについて考える。 自分の家庭でできる仕事分担を考え、実行する。</p> <p>●「勤労体験」(3・4年 総合・道徳・各教科→特に道徳と社会で展開) 職業調べ(社会)→消防署、警察での仕事を学習、その後自分の興味に沿った職業を調べる。 働く事の意義を考える(道徳)</p> <p>●「何のために学ぶか」 (道徳)→2人の先人の生涯から学ぶ事がどのような事が考える。 (特活)→ゲストティーチャーを招いて話を聞く。</p> <p>●「選択や決定」(国語・理科) それぞれの教科について、学習内容を2種類提示。児童が興味のあるほうを選択し、学習する。</p>	<p>●「新しい自分の発見を」(1年) 他者理解を通して、自分の新たな一面を知る 「どこまで信頼できる？ーブラインドウォークー」 ブラインドウォークを通して、信頼、優しさについて考える 「相手の都合に合わせるの？ーアサーショントレーニングー」(人と意見が違ってもよいこと・しかし自分勝手ではないことをワークシートで学習)</p> <p>●「自己理解：自分を知ろう」(道徳・特別活動) 保護者からの手紙(これまでの自分をたどる) 新聞の切り抜き(考えが多様にあることを知る) 適性検査</p> <p>●「中学校での進路適性～役割理解と職業適性～」 今までの活動(部活・係・委員会…)を振り返る 職場体験 やりたい仕事について考える</p> <p>●「中学卒業後の進路」 「自分の適性と進路」 「上級学校調べ」(模擬授業を受ける) →これからの課題と自分の進路について考える。</p> <p>●「職業調べ」(総合)ソフト、ホームページを使って 「職業人を描く」(総合・特活・美術) 「新聞作成」(総合)→これまでの情報を整理し、伝える</p> <p>●「望ましい職業観・勤労観の育成」 「職業調べ」(1年 総合・特活) 地域に關係のある職業について調べる。 なぜ働くのかについても考える。</p> <p>●「勤労体験」 「物のねだん」(特活) MESE を使って物の値段を決める。(経済の仕組みとともなげて、意思決定能力を養う) 職場体験(総合)</p> <p>●「何のために学ぶか」 1年 (中学3年間で)学が意義を考える 2年 働く意味を考える 3年 (生涯学習として)何のために学ぶか考える</p> <p>●「2年に向けて選択科目を考えよう」(1年) なぜ学ぶのか。また選択科目についてはなぜこのように選んだのか考える。(自己理解)</p>	<p>●「高校生活の指導に当たって」 今の自分を見るアンケート</p> <p>●「自分を知ろう」(1年) 好きな事、得意な事をまとめて自分を見つめる 「〇〇さんの推薦書」(3年) 互いによいところを見つめあう 他人から見た自分を知る</p> <p>●「適性理解」 「レディネステストを活用しよう」 自分の得意、不得意を調べる 仕事は周りの人の関わりがあること、各人が各々の持ち場で能力を発揮している事を学ぶ。</p> <p>●「上級学校見学」(特活・総合) 興味のある大学について調べる オープンキャンパスに行く 調査について周りに知らせるためプレゼンテーションを行う。</p> <p>●「職業調べ」 あるテーマに沿った職業をあげ、職業の内容を調べる。</p> <p>●「望ましい職業観・勤労観の育成」 職業人へのインタビューに向けて、マナー、その職業の内容などを調べる。</p> <p>●「インターンシップを通して」 ワークシート(事前指導、日誌、事後指導)</p> <p>●「学ぶ事の意義」 今の学びがどのような事にいけるのか、今のどのようなことにいけているのか考える。</p> <p>●「選択や決定」 選択科目の決定</p>
2004 (H16)	<p>●「進路選択・決定に向けて」(6年 総合・道徳・各教科) 「自分を知ろう」・「仕事調べ」・「決定のために」(決定を行うためにはどのような条件があるのか考えるなど)</p> <p>●「二分の一人式」(4年) 今までを振り返る→今を見つめる→これからを考える (二分の一人式を通して自分のよさ、これから自分がやっていく事、頑張る事について考える)</p> <p>● 小・中一貫 ・企業家精神涵養教育(プレゼンテーション) ・算・理・技の統合(「りょうがえ名人になろう」(小2-1 000までの数の応用として)・ ・国・英の統合(「言葉で体を表してみよう」小6)</p>	<p>●「中学卒業後の進路」「適性と進路」(3年) 先輩の話を聞く 適性検査 上級校の訪問 自己分析 上級校の調べ学習</p> <p>●「自分の将来を考えよう」(3年) 色々な職業の人の生き方を調べる。 自分ならどのように人生を選択していくか考える。 (結婚・仕事・子育て等)</p>	<p>●「進路決定」(1年) 今までどのような決定をしてきたのか考える。 (文理選択のための)自己分析、文理の内容理解、職業調べをする。→これからの進路を考える。</p> <p>●「将来の生活設計」 これまでの夢、家庭での役割等を振り返る。 これからの生活(職業、地域、余暇、学習) についてどのような役割を持つていくか考える。</p> <p>●(産業社会と人間) 自己分析(能力、適性、興味、関心、進路希望) 職場体験 ライフプラン発表会</p>

て、題材名と教科をまとめた(表1)。

小・中・高等学校ともに実施時間については、「総合的な学習の時間」、特別活動が中心となっていた。小学校では自己理解や学校調べに関する学習内容が、中学・高等学校では職業調べ(情報収集)や勤労体験、自己理解につながる活動が多く見られた。

教科での実践事例は少ないが、「家庭科」「社会」「理科」「国語」「美術」、および「産業社会と人間」(主に高等学校の総合学科や専門学科で履修)の実践事例が認められた。その多くは、体験的学習と関連させた単元を扱うなど、特別活動等の補助的な授業にとどまっていた。

一方、教科名の記載のない事例の中には、「家庭科」の内容とみなせる単元が認められた。例えば、中学校の「自分の将来を考えよう」や高等学校の「将来の生活設計」は家庭科の「生活設計」の領域内容に相当するものである。

前述のように、既にキャリア教育は各教科・科目において実施する構想が明示されている。しかし、現状ではキャリア教育は特別活動や「総合的な学習の時間」を中心に実施されており、教科での指導はほとんど行われていない。また、教科内容との関連が未検討のため、教科実践として位置づけられていない実態も示された。

教科におけるキャリア教育実践は今後の課題であるが、教科カリキュラムをキャリア教育の観点から見直すとともに、教科の垣根を越境して総合的に学習できるテーマについて整理し、その内容や方法を再吟味していくことが必要であると考察する。

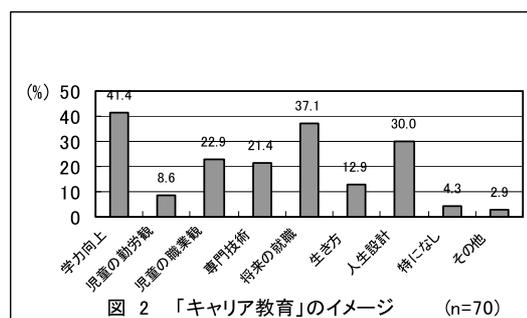
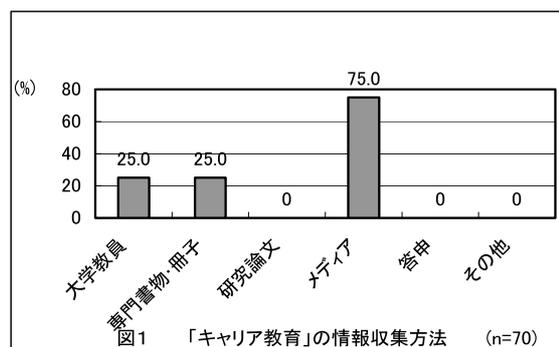
3. 2. 大学生の「キャリア教育」の認識に関する調査

キャリア教育に関する質問項目の分析を行った。キャリア教育という言葉に関して、「聞いたことがある」者が62%、「聞いたことがない」者が38%であった。「聞いたことがある」者のうち「キャリア教育の内容を知っている」者が14%で、「キャリア教育の内容を知らない」者が86%であった。すなわち、「キャリア教育」という言葉を聞いたことがある大学生は多いものの、その内容まで理解している者は僅かであった。

また、「キャリア教育の内容を知っている」と答えた者の大部分は、その知識をメディアによる情報から得ていた(図1)。

「キャリア教育」という言葉のイメージについては、「学力向上」と捉えている者が最も多かった(図2)。このようなイメージは、進学指導に重点が置かれた現実の進路指導の過程で、無意識に形成されたものと推察される。ついで、「将来の就職」という回答が多く、「生き方」と広く捉えているものは少なかった。すなわち、学生はキャリアを職業キャリアに限定して認識

する傾向にあり、「生き方」として統合的に捉える視点は希薄であることが示された。



以上の結果より、教員養成大学の学生はキャリア教育についての知識・理解は著しく乏しく、その知識は主にメディアによる情報から得ていることが示された。メディアに依拠していることとも関連して、キャリア教育を「学力向上」のための教育とみなす学生が多かった。このように偏重したイメージをもっていることは、今後のキャリア教育推進を妨げる大きな要因になると考えられる。

現状を鑑みると、学校教育現場の課題に応えキャリア教育実践に寄与できる教員を養成していくためには、まず早急に、キャリア教育に関する基礎的・基本的な知識を習得させる必要があるといえる。

3. 3. 大学生のキャリアに関する能力の実態に関する調査

3. 3. 1. キャリアに関する能力の下位尺度の構成

キャリアに関する能力の質問項目について、主成分分析法による因子分析(Varimax回転)を行い、5因子を抽出した。その結果は表2に示す通りである。

因子分析解をVarimax回転した負荷行列から得られた5つの因子を以下のように解釈し、この結果をふまえて尺度を構成した。

第1因子は「今後の仕事や人生についての展望をもっている」「今後の仕事や生活において必要と思われること(経験)に積極的にとりくんでいる」の負荷が大きく、将来の計画や準備と解釈できるので、「将来展望・設計」尺度を構成した。

表2 質問項目の因子分析 (Varimax解) の結果

項目内容	将来展望・設計	意思決定への自信	情報収集・経験への積極性	肯定的な自己理解	他者との関係重視	共通性
	($\alpha = .76$)	($\alpha = .72$)	($\alpha = .76$)	($\alpha = .72$)	($\alpha = .63$)	
今後の仕事や人生についての展望をもっている	0.77	0.06	0.22	0.13	0.22	0.71
今後の仕事や生活において必要と思われること(経験)に現在取り組んでいる	0.60	0.25	0.06	0.01	0.01	0.42
目標に向かって頑張れば、大抵のことは出来るような気がする	0.55	0.36	0.11	0.34	0.01	0.35
今後の人生に向かって、何か計画している	0.54	0.09	0.00	0.01	0.22	0.56
重要な決定の結果、起こってくるいろいろな可能性について推察できる	-0.04	0.74	0.23	0.07	0.23	0.47
困難な事態に直面した時、どこに問題があるかすぐに見つけることができる	0.11	0.54	-0.02	0.00	-0.05	0.50
目標を決めたら、どうすればうまくいくのか考えて準備をする	0.29	0.53	0.12	0.08	0.06	0.55
よりよい解決策をみつけるためにできるだけ多くの情報を集められる	0.14	0.50	-0.07	0.20	0.25	0.56
周りの人に頼りにされていると思う	0.25	0.46	-0.02	0.21	0.20	0.45
周囲の人の、仕事の内容や進め方について知りたい	-0.03	0.11	0.68	-0.10	0.13	0.66
自分の能力や個性を生かす仕事には、どんなものがあるか知りたい	-0.07	-0.08	0.64	0.09	0.20	0.39
今後の仕事や人生が気になっている	0.37	0.03	0.63	-0.10	0.03	0.31
仕事や生活に関連する様々な経験は、今後の人生に役立つと思う	0.47	0.13	0.57	0.02	0.02	0.38
今後の仕事や生き方を見つめるために、様々な経験を行いたい	0.41	0.13	0.47	0.01	-0.19	1.00
自分のことが好きである	0.05	-0.03	-0.10	0.98	0.13	0.50
自分自身に自信をもっている	0.04	0.23	-0.03	0.67	0.04	0.27
重要な決定の際、自分の信念や価値を満足させる選択をしている	0.14	0.33	0.07	0.37	0.06	0.59
人との調和やルールを重んじている	0.17	0.37	0.17	0.10	0.63	0.29
他の人に対して、誠実であるように心がけている	0.05	0.03	0.13	0.03	0.52	0.42
人とのつながりを大切にしている	0.38	0.18	-0.03	0.14	0.47	0.35
寄与率(%)	12.28	10.81	10.04	9.16	6.28	48.58

第2因子は「重要な決定の結果、起こってくるいろいろな可能性について推察できる」「困難な事態に直面した時、どこに問題があるかすぐに見つけることができる」が高く、いずれも意思決定への自信と解釈できるので「意思決定への自信」尺度を構成した。

第3因子は「周囲の人の、仕事の内容や進め方について知りたい」「自分の能力や個性を生かす仕事にはどんなものがあるか知りたい」が高く、仕事や職業の情報や経験に対する積極的な態度と捉えられるので「情報収集・経験への積極性」尺度を構成した。

第4因子は、「自分のことが好きである」「自分自身に自信をもっている」が高く、自分自身への肯定的な捉え方と解釈できるので「肯定的な自己理解」尺度を構成した。

第5因子は「人との調和やルールを重んじている」「他の人に対して、誠実であるように心がけている」が高く、他の人に対する配慮および人とのつながりの大切さや、他者との関わりを重視する態度と解釈できるため「他者との関係重視」尺度を構成した。

このようにして構成した5つの尺度は、家庭科におけるキャリア教育モデルの能力領域(河崎、2000)に対応するものと判断できる。すなわち、第1尺度「将来展望・設計」はモデルの「ライフキャリア・プランニング」に、第2尺度「意思決定への自信」はモデルの「意思決定」に、第3尺度「情報収集・経験への積極性」はモデルの「情報収集/経験」に、第4尺度「肯定的な自己理解」はモデルの「自己理解」に、第5尺度「他者との関係重視」はモデルの「人間関係」に対応するものである。

項目全体のCronbachの α 係数の算出を行ったところ、0.86と高い値であった。各尺度別にCronbachの

α 係数の算出を行ったところ、「他者との関係重視」尺度の信頼性の推定値は0.63であったが、他は0.7以上となり、概ね信頼性が確認された。

3. 3. 2. キャリアに関する能力の下位尺度得点

構成した尺度項目の合計点の平均値を、下位尺度得点として求めた。表3は各尺度得点と平均値である。各尺度項目の平均値は「情報収集・経験への積極性」が高く、「肯定的な自己理解」「意思決定への自信」が低かった。

表3 キャリアに関する能力の下位尺度得点と標準偏差

	平均値	標準偏差
将来展望・設計	3.70	0.72
意思決定への自信	3.33	0.57
情報収集・経験への積極性	4.29	0.59
肯定的な自己理解	3.20	0.75
他者との関係重視	3.94	0.63

また、表4は各尺度の相関を示している。「意思決定への自信」「情報収集・経験への積極性」「肯定的な自己理解」「他者との関係重視」のいずれも「将来展望・設計」と相関が高かった。将来設計に関する能力は、他の能力を基礎として、最終的に将来を設計していく創造的な能力である。「将来展望・設計」が他の4つの尺度と相関が高いという結果は、「意思決定への自信」「情報収集・経験への積極性」「肯定的な自己理解」「他者との関係重視」の能力を育成することが、「将来展望・設計」の能力育成につながる可能性があると、推察されるものである。

表4 下位尺度間の相関

	将来展望・設計	意思決定への自信	情報収集・経験への積極性	肯定的な自己理解	他者との関係重視
将来展望・設計		0.44**	0.38**	0.27*	0.41**
意思決定への自信			0.21	0.35**	0.43**
情報収集・経験への積極性				0.01	0.25*
肯定的な自己理解					0.25*
他者との関係重視					

p<.05* p<.01**

3. 3. 3. 性別による差異

各尺度の性別による差異について、t検定を行った。その結果「情報収集や経験への積極性」では、女性の方が男性より有意に高く (t (69) =29.25, p<.0.5)、「肯定的な自己理解」では、男子が女性よりも有意に高かった (t (69) =20.01, p<.0.5) (表5)。

男性は自己を肯定して自信を持っているのに対し、女性は、肯定的な自己理解が得られない状態で、情報収集や様々な経験に取り組んでいることが推察される。女性の肯定的な自己理解を妨げる要因に関しては、女性の生涯発達の在り方やジェンダーの視点から、更なる分析が求められよう。女性の肯定的な自己理解を支援するプログラムの開発が、課題とされる。

表5 性別にみた差異

	男性		女性		t値
	標準平均	標準偏差	標準平均	標準偏差	
将来展望・設計	3.86	0.75	3.62	0.69	24.53
意思決定への自信	3.45	0.68	3.26	0.50	24.52
情報収集・経験への積極性	4.07	0.74	< 4.40	0.47	29.25*
肯定的な自己理解	3.46	0.78	> 3.08	0.71	20.01*
他者との関係重視	4.00	0.64	3.91	0.63	28.68

p<.05*

3. 3. 4. 将来に対する不安意識

将来に対する不安の有無について、「不安である」と答えた者が81.4%、「不安はない」と答えた者が18.6%であり、大部分の学生が将来への不安意識を持っていた。また、性別による差異について、カ二乗検定を行った。その結果、女性の方が男性よりも、将来に対し不安を感じているものが有意に多かった (χ^2 (1,N=70) =5.25, p<.0.5) (表6)。

表6 将来不安の性別にみた差異

性別		将来不安		合計
		不安はない	不安がある	
女性	度数	2	45	47
	性別の%	4.3%	95.7%	100.0%
男性	度数	5	18	23
	性別の%	21.7%	78.3%	100.0%
合計	度数	7	63	70
	性別の%	10.0%	90.0%	100.0%

p<.05*

「不安である」と回答した者の自由記述内容を分析したところ、表7に示すような6類型に分類できた。「何がしたいのか分からない」という不安が最も多く、次いで「教員以外の職種を知らないことへの不安」が多く認められた。調査対象が2年生であったことから、就職や就職活動(教員採用試験)以上に、自分自身の在り方を模索した不安内容が顕著となったものと思われる。

また、「教職に就いた後働き続けられるのか」「仕事と家庭生活を両立できるのか」といった就職後の職務継続や、家庭生活との折り合い等に関する不安が、特に女性において多数認められた。すなわち、女子学生は、就職だけでなく、就職後の職業キャリアと生活キャリアに関する長期的な視野の中で不安を抱いていた。

表7 将来不安(自由記述)

記述内容	人数
1. 何がしたいのか分からないという不安(例:自分がどんな仕事につけるかはっきりしていない)	16
2. 職種を知らないことへの不安(例:教師になれなかったら何になるか、教師以外の道はないのか)	11
3. 就職できるかという不安(例:採用試験に受かるか、職に就けるのか、教師になれるのか)	10
4. 就職活動(教員採用)に対する不安(例:どうやって就職をしていくのか、教探の試験はどうするのか)	7
5. 職務継続への不安(例:教職に就いた後、働き続けられるか、教師になって大きな壁に当たったときどうすればいいのか別の道はないのか)	6
6. 就職後の家庭生活とのかかわりに関する不安(例:仕事と家庭が両立できない気がする、仕事をしていたら結婚できない気がする、プライベートは充実できるのか)	5

4. まとめ

本研究の結果から、現在、小・中・高等学校の教育現場では、「総合的な学習の時間」を中心としてキャリア教育が実施されていることが明らかになった。しかし、教科での指導は「総合的な学習の時間」の補完的な内容にとどまっている事例が多く認められ、教科におけるキャリア教育実践は今後の課題であることが示された。

また、教員養成大学の学生は「キャリア教育」についての知識を持ち得ておらず、現段階では、教員養成教育においてキャリア教育に関する知識を習得させることが、キャリア教育実践に向けての第1の課題であると考察する。その上で、「総合的な学習の時間」および教科における指導能力、プログラム開発能力の育

成が次なる課題といえよう。

キャリアに関する能力については、因子分析の結果「将来展望・設計」「意思決定への自信」「情報収集・経験への積極性」「肯定的な自己理解」「他者との関係重視」の5つの因子が抽出された。因子分析結果をもとに構成された尺度は、家庭科の視点から構築したキャリア教育の能力領域、すなわち自己理解、人間関係、情報収集/経験、意思決定、ライフキャリア・プランニングの5能力領域に対応するものである(河崎、2000)。尺度の妥当性については今後詳細な検討が必要である。しかし、教員養成大学の学生を対象とした本研究において、5つの尺度が構成されたという結果は、大学での5能力領域の学習の可能性が示唆されたといえる。

各尺度項目の平均値は「情報収集・経験への積極性」が最も高く、「肯定的な自己理解」や「意思決定への自信」は低かった。近年の情報教育の進展に伴い、学生の情報収集能力は高くなっていると予想されるが、自己理解や意思決定については未だ学校教育の中で十分扱われていないため低い傾向にあると考えられる。自己理解や意思決定の能力育成は、今後の課題と考えられる。

キャリア教育を実施するにあたっては、まず教師自身がキャリアの諸能力について理解し、自己のキャリア設計を行うことが必要である。大学生の実態をふまえた場合、特に自己理解および意思決定の能力育成は第3の課題とみなすことができる。

さらに、女性は、男性よりも「将来不安」が有意に高いという結果についても看過できない。特に、就職後の職業キャリアと生活キャリアの折り合いに関する不安が顕著であることから、キャリアを職業キャリアに限定せず、統合的な視野で検討する必要があるといえよう。したがって、第4の課題として、職業キャリアと生活キャリアの両視点から、キャリア・プランニングを行う能力が必要であると考察する。このことは、男女共同参画社会の実現という側面からも重要な意味を持ち、学校キャリア教育の実施にあたり重視されるべき視点である。

本研究で得られた課題をまとめると、以下のようになる。

1. キャリア教育に関する基礎知識の習得
2. キャリア教育の指導能力の育成（「総合的な学習の時間」および教科）
3. 自己のキャリアに関する能力の育成（特に意思決定、自己理解の能力の育成）
4. 生活キャリアと職業キャリアを総合する視点の育成、

今後は、調査対象者を増やして検討を重ねていくとともに、具体的な教師教育の方法、プログラムの開発が課題と考える。

引用文献

- 河崎智恵（2000）家庭科におけるキャリア教育モデルの開発 日本教科教育学会誌, 第23巻第1号, pp.67-75.
- 河崎智恵（2003）家庭科におけるキャリア教育モデルの検討－能力領域の尺度の構成を中心に－進路指導研究, 第22巻第1号, pp.23-32
- 文部省（1999）中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」
- 文部科学省（2004）「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究者会議報告書」
- Partridge, E. (1963) *Origins*, Routledge&Kegan Paul
- 仙崎武・職業教育・進路指導研究会（1998）平成8・9年度文部省委託調査研究 職業教育及び進路指導に関する基礎的研究（最終報告）職業教育・進路指導研究会

付記 本研究は、平成16年度文部科学省科学研究費補助金 若手研究（B）課題番号15700458の助成を受けて行ったものである。